

新選代表作時代小説④

秘剣闇を斬る

日本文藝家協会 編





新選代表作時代小説④ 昭和43年度
秘剣闇を斬る

に 1 - 4

編纂者	日本文藝家協会
発行者	深見兵吉
発行所	光風社出版株式会社
	〒112 東京都文京区春日 2-4-1
	電話 03(5800)4451
	FAX 03(5800)4452
印刷	大盛印刷株式会社
製本	株式会社越後堂製本

乱丁、落丁の場合はお取り替えします
定価・発行日はカバーに表示してあります

ISBN4-87519-053-0

日本文藝家協会 編

秘剣闇を斬る

新選代表作時代小説④



光風社文庫

編纂委員／磯貝勝太郎・伊藤桂二

尾崎秀樹・早乙女貢

目次

ごめんよ	池波正太郎
山吹女房	山岡 莊八
山雀	伊藤 桂一
叛臣伝	早乙女 貢
清兵衛流極意	佐賀 潜
小室某覚書	司馬遼太郎
薄野心中	船山 馨
鞘師	五味 康祐
怪談累ヶ淵	柴田錬三郎
雪の日のおりん	岩井 護

解説

尾崎秀樹

399

池波正太郎	7
山岡 莊八	67
伊藤 桂一	91
早乙女 貢	117
佐賀 潜	201
司馬遼太郎	239
船山 馨	255
五味 康祐	277
柴田錬三郎	323
岩井 護	353

まえがき

尾崎 秀樹

時代小説は多少の盛衰はあったにしろ、いつの時代にも広く読まれてきた。大衆と共にあったといっている。日本文藝家協会は戦前『大衆文学集』を年次刊行物として出版したが、戦後は『代表作時代小説』として昭和三〇年度以後現在まで刊行してきた。その収録作品を一読するだけで、時代小説の発展をたどることができる。

『代表作時代小説』は〈時代小説傑作選〉として、一部文庫化されているが、今回新たに〈新選代表作時代小説〉として編集された。ここに選ばれた代表的な時代小説の中・短篇を通して、その時代、その時代の時代小説の推移と特質を展望することができる。

秘劍闇を斬る―新選代表作時代小説④―

ごめんよ

池波正太郎

一

そのことがあったのは……。

青山熊之助が十二歳になった嘉永二年（西暦一八四九）の初秋のことである。

熊之助の家は、下谷・車坂にあった。下谷町代地の町家を北へぬけると、そこはもう入谷田圃で、わら屋根の百姓家や寺院、武家の下屋敷なぞが点在する田園風景となる。

子供たちにとって、こうした環境がどのような役割をするものか、いうまでもなからう。その日。

熊之助は、八歳になる弟の源次郎をつれて入谷田圃へ蜻蛉とんぼとりに出かけた。

さむらいの子、といっても、青山家は七十俵どりの小普請で、徳川將軍の家来のうちでも

ほんのはしくれだし、御役にもついていない。当主の彦十郎が酒にも女にも目がないという暮しをしていながら、下女と下男を抱えてゆけるのも、妻女みねの実家からの援助があったからだ。

青山家のまわりには町家が多いし、熊之助兄弟も幼いころから町の子たちとこみになつて遊んでいたものだ。

で、兄弟が蜻蛉つりの帰途、その小さな事件がおこった。

まがりくねった田圃道の彼方に松平出雲守下屋敷の塀がのぞまれるあたりへ青山兄弟がさしかかると、道ばたで放尿していた男が、二人を見てつまらぬ興に乗り、

「ほれ……ほら、ほら、ほらよ」

いきなり躰の向きを変え、おのが躰からほとばしる汚いものを、二人にかけてよこした。

「ぶれいな、何をする!!」

熊之助が叫ぶと、

「何を、なんだと!!」

男は、かなり酔っていたし、蓬髪の、獰猛な顔つきで、腰に長脇差を帯びていたのは、博徒か無宿者か……。

とにかく、

「こ、こいつら。文句があるのか。え、あるなら叩つ斬つてやろうじゃねえか。こらやい、こらこら、斬られたいか、え、斬られたいか」

びゅつと、脇差を引きぬいたものだ。

夕闇が淡くただよっていて、人ひとり通っていない。

右のまなじりから頬、あごへかけて深い傷痕があるその若い無頼者が脇差をふりかざして近寄って来たとき、ものもいわずに逃げた。

逃げたのは兄の熊之助で、弟の源次郎はそやつにえりがみをつかまれ、顔いちめんに唾を吐きつけられつつ、小突きまわされている。

熊之助は、かなり離れたところの庚申堂の蔭から、幼い弟がいたずらされるさまを胸がしめつけられるようなおもいで見つめていた。

「兄さま。兄さまあ……」

源次郎は必死で救いをもとめているが、十二歳の兄さまは庚申堂の羽目板へすがりついたまま、ふるえつつづけているのであった。

源次郎があきらめたらしく、無頼者に頭を下げ、何か、わびをいいはじめた。その弟の頭をぐいぐいと突きまわしたあげく、

「この餓鬼め」

脇差の頭で、源次郎のあたまを打った。

源次郎が、声もあげず、地面へのめりこむように倒れた。

無頼者は、ののしり声をあげつつ、脇差をふりまわしながら、傍の雑木林の中へ消えて行った。

しばらくして、源次郎が起きあがり、氣丈に血がふき出す頭を押えて歩き出すのを見ていながら、

「あ、ああ……もう……」

熊之助は屈みこんだまま、恥ずかしくて恥ずかしくて、どうにも弟の傍へ飛んで行つてやれなかった。弟の姿が松平屋敷に沿つて右へ見えなくなつてから、熊之助は駈け出した。ふらふらと、源次郎が歩むうしろへ、やつと近寄るや、

「兄さま、ひどい」

弟が屹とふりむいていった。

「ひどい」というよりも「卑怯だ」といいたかつたのであろう。

ゆるしてくれ……ともいわず、うつむいたまま、熊之助は弟に背を向けた。源次郎が拗ねるでもなく素直に兄の背へ乗つた。

家へもどるまで、二人とも無言であつた。

帰ると、大さわぎになつた。めずらしく在宅していた父の彦十郎も、

「こ、これは深手だ。いったい、どうしたのだ」

顔色が變つたほどである。

源次郎は、いささかのためらいもなく、蜻蛉を追いながら転倒し、石にあたまをぶつけたのだと、簡單明瞭にこたえた。

熊之助は、うなだれたままだ。間髪を入れず、

「兄のお前がついていて、このざまは何たることだ!!」

父の怒声が飛んできたので、これを受けるかたちとなったから、だれも熊之助の挙動をあやしむものはない。

その夜、源次郎はひどい熱を出した。

母のみねの実家は、これも下谷の御成街道にある堀越屋・利右衛門という薬種問屋で、このほうからも医薬の手がのべられ、さいわいに五日もすると元気になった。

熊之助は、ついに弟へ、あのことをあやまらなかつた。

源次郎は、もちまえのこだわらぬ性格ゆえか、間もなく何も彼も忘れてしまい、以前のごとく、

「兄さま、兄さま……」

と、熊之助を慕って遊びにも出るようになったが、

「熊めが、急に大人びたようだな」

父が母にいった。

熊之助は小柄であるが、下ぶくれの、つぶらな眼つきをした顔だちで、父の彦十郎が酒に酔っては「あぐらの熊や」と、たわむれて呼ぶほどに、大きな鼻があぐらをかいていて、それが彼の顔貌に一種、愛嬌をそえていたという。

ひどいのは母の実家「堀越屋」の奉公人どもで、熊之助が遊びに来ると、
「へへっ、車坂のでこ熊ちゃんが来ましたよ」

なぞと、かげ口をきいたものだ。

熊之助のひたいが、すこぶる張り出していたからであろう。

翌、嘉永三年の正月になって、

「父上に、おねがいがございます」

と、熊之助があらたまつた口調でいう。

「なんだ？」

「剣術をまなびたいので……」

「なんだと、お前が剣術を……」

父上のほうがびっくりしたというのだ。

將軍に御目見得もかなわぬ御家人ながら、それでも徳川のさむらいはさむらいである。さ

むらいの子が剣術をやろうというのにおどろく父親もないものだが、

「どうも大刀タテは重くていけませんよ」

なぞといい、短刀ひとつを前へ差しただけの着流し姿で酒を飲みに出て行く青山彦十郎なのだから、無理もないところか……。

「いざとなれば槍をかついで敵勢の中へ真先に突きこもうという者が、そうした具合のものであったのだから、徳川のさむらい、もうすでに値うちはなかったのですね。私の親父のようなのが、そっちにもこっちにも、ごろごろしていたものです」

後に、青山熊之助はこうのべている。

「む……そりゃ、ま、おれの後つぎになるお前だから、剣術をやろうというのは結構だが……お前、怪我なぞをしてはいけないよ」

と、父上がいう。

熊之助は、何か哀しげな微笑をもつて、これにこたえた。

「で……どこへ弟子入りする？」

「長円寺うらの山崎先生のところへ」

「山崎……」

青山彦十郎は、ぽかんと口をあけ、

「あの、爪楊子をけずっている爺いじいのところへ行ってお前、いったい何をしようというのだ」
あきれかえった。

二

下谷・車坂から東へ……浅草へ通ずる往還をしばらく行くと、左手に「三十三間堂跡」とよばれる一劃がある。

呼名のごとく、三代將軍・家光のころに三十三間堂があつたのだが、元禄十一年の大火に焼失し、このあとへ下谷辺の寺院が替地として寄り集まったので、あたり一帯、寺院と門前町ばかりといつてよい。現、台東区・松ガ谷一帯がそれで、いまも尚、寺院が多く当時のおもかげを微かにしのぶことができる。

長円寺は、この寺町の表通りを北へ切れこんだところにある小さな寺院だが、北面の百姓地と小道をへだてたところに寺領の空地がある。

この空地が寺の菜園になってい、これを管理し、手入れをする番人の小屋が中に在った。四ツ目垣が、小屋を囲んでいる。

小屋の主人は五十がらみの痩せこけた男で、名を山崎平たいらという。

彼が、長円寺の菜園番になってからどれくらいになるのか……ともかく、青山熊之助が物心つくようになったときには、ここに住んでいたようである。

鬚は結わず、えり足のあたりまでたらしした髪には、いつもきれいに櫛が通っていた。よく見ると、なかなかの好男子で、色のあさぐろい、きりりとした顔貌だから、あたりの寺の門前の茶店にいる女たちが入れかわり立ちかわり、茶だの団子だのをもってあそびに来る。

女たちは、山崎平のことを「先生」とよぶ。いつの間にか彼が剣客だという評判が、どこからともなく立ちのぼっていたからであろう。

「あのお人は、何でも空鈍流くうどんりゅうの剣術をおやりなさるそうだよ」

と、いったのは、熊之助には外祖父にあたる堀越屋利右衛門である。

というのは、長円寺が堀越屋の菩提所であったからで、寺の和尚も山崎の履歴については、「くわしゅうは知らぬなれど、京のな、知恩院からたのまれたお人で、ああ見えてもな、剣術のほうでは大変な腕前らしゅうござる」

堀越屋に、そういったそうだ。

しかし、これを本当にするものはいない。

突けば飛ぶような痩身だし、茶店の女たちには大もてでいるのを、菜園の小屋を垣根ごしに見たやつどもが、

「へっ、苧殻おがらが団子を食っていやがる」

などと、にくまれ口をきく。

山崎平は、女たちが来ても別に口をきくようなことはなく、只にことに相手の「こぼしばなし」に相槌をうちながら、何と内職の爪楊子をけずっている。しかも、この爪楊子は浅草の「八百善」や向嶋の「小倉庵」、深川の「平清」など江戸でも超一流の料亭から、

「爪楊子は山崎先生のものでなくては……」

というので注文が絶えず、長円寺の和尚も、

「あのお人は、爪楊子をこしらえるだけでもそりや立派に暮してゆけるのでな」と、洩らしたことがある。

あとは菜園のめんどろを見て倦むことを知らず、

「そりやもう、おいしい茄子やら胡瓜を食べさせてもらえますのでな」

夏野菜の好きな和尚が、よだれをたらしながら堀越屋へ語ったそうだ。

だから、この先生が剣術の稽古をするところなぞ、見たものは一人もないし、第一、門弟ひとりいるわけではない。

「堀越屋はそういうが、おれは信ぜぬよ。ありやあま、やかしものだ。あたまが少し狂ってい